

第3号 華山会報

平成11年10月11日
財団法人華山会



杞憂を以て死した華山先生

文星芸術大学学長

上野 憲 示

渡邊華山先生は、その最晩年、国元田原塾居という立場を案じつつも、達観の境地というべき、半ば居直りに似た芸術至高的信念で絵画制作に自らを没頭させている。残された書簡類には、「画キ候ものハよけれとも、求ニ心する事ハ其心違ひにて、親類共ヤカマシク申候。・・・それ故毎日ヒクヒク致居候。」（鈴木与兵衛宛天保十二年四月二十六日付書簡）等と、その複雑な心中を覗かせている。

そんな華山先生が絶えず危惧していたのは、まさに、「主人安危にもかゝるはる」、武士として忠孝にそむいたあるまじき事態となることであった。「某氏、隠居にて画もかかれ候や、年号を替えしため候よし」との風評が洩れ伝わる中、老中水野忠邦の用人小田切要助の浜松派遣を自らの身辺調査と判断して、ことのほか狼狽し（半香宛「火中書」の文面に顕著）、師松崎慊堂の「華山は杞憂を以て罪にかかり、また杞憂を以て死す」との言葉通り、「もののみ」たる気概と「士大夫」然とした誇りを胸に、「ここに進退窮まりりと自ら命を絶つてしまつたのである。」

友信老公の述懐の記や、滝沢馬琴の「猶其の依にてあるは、主君の為にあしかるべしと言いきかせし者あり」（『著作堂雜記』）との表現に、華山先生をよく思わない一派の謀略と取る向きもある。が、三宅家譜撰集拜命や、海防掛、老公の嫡子們太郎君の傳役等の就任、そして塾居中の破格の厚待遇等々、その晩年は藩主康直公の高配をはじめ、友信公との交誼、真木定前（まきさだのり）ら高配藩士の表敬など、思いのほか温かい善意に囲まれての生活であり、ここは周りの善意の諫言や忠告の交錯した中での、情報の誤認に発した杞憂の為せるところとみるべきである。

そこで、華山先生が最も危惧した主君へ累が及ぶことの中身であるが、私は、単純に「罪一等減じて国元預かりとなつた罪人の監督不行届き」という咎に留まるとは見えていない。すなわち、「罪人に内々公命を発して、藩の借財の代価に当てる絵を描かせた」主君自身の罪科という秘事があって、その発覚の危惧が華山先生を狼狽させたと考えたいのである。田原の方々からは、お叱りを頂戴しかねないが、名作「猛虎図」が、債権者三河の前芝村の豪農加藤廣正（六蔵、加藤清正の子孫）の希望を受け、「華山君命（康直侯）をもつて・・・」（石川鴻齋記）描かれたものであり、耕織図対幅のことに触れた四月二十九日付（天保十二年）の書簡中、その揮毫の遅滞を詫びる言い訳の「申上兼候主用一而」こそが、塾居中の罪人華山に対する、借財弁済のための絵画制作（必ずしも「猛虎図」というわけではないが）という世にはばかれる公命と理解したいのである。さらに同書簡の「死罪拜」等の言い回しや、忠孝の精神を子に諭したものである。少々焦点がずれた感のする長男立宛の遺書の「二君に仕ふべからず」との文面等、いくつが脈絡を繋いでいくことでこの感を強くするのである。いかがなものだろうか。

なお、華山先生自刃の後、藩主に咎はなく、逆に奏者番拜命など華山先生の悲痛な決意が実り、まさしく死して忠義を果たしたのであった。



田原町博物館 正門

寺子屋

田原町商工会長
鈴木喜玄

田原町商工会が毎年行っている、まちおこし運動「華山の郷土・ふれあいまつり」では、恒例によつて、寺子屋が開かれ、町民の関心を呼んでいる。これは、いうまでもなく、華山の傑作「一掃百態図」に由来するものであり、当時の寺子屋のはた



一掃百態図 寺子屋図

した役割は、わが国の教育史上のみならず日本の近代国家の発展に大きな役割をはたしているのである。

寺子屋は、未成年者に対する民衆教育の機関で、武士とそれを除く農工、商とを身分的に差別するためのものであったが、「一掃百態図」が描かれた文政期においては、全国的に、寺子屋が急増し、学習内容も、読み、書き、そろばんなどを学ばせ、全国的に習字がその中核をなしていた。ここでの習字とは、毛筆のみが筆記用具であった当時の実情に即して実用をねらいとするものであり、このため書体も日常生活に頻繁に使用された行書体、草書体が主であった。また、ここでの習字は、「手習う」ことを通して「もの読む」ことを教え、「手習い読む」ことを媒介して、その文字や文章を理解させようとしたものである。

わが国の寺子屋の総数は、約五万と推定されており、渥美郡内でも、一四二一（田原八二、赤羽根二二、渥美四八）を数えている。華山の「一



華山の郷土・ふれあいまつり

掃百態図」は、江戸の生活の中で眼に触れたかぎりの、世態、風俗を描写したもので、この中には、大名行列や武芸稽古のような武家風俗から、棒振り、人足、露店の小商人、さらには最下層に属する雪駄直しにいたるまで、あらゆる階層の人びとの生態を、すべておなじ人間として、軽妙な筆致をもってリアルに描いている。

目次

	題字「華山会報」華山会理事 小澤耕一
P	杞憂を以て死した華山先生 上野憲示
P	田原町商工会長・目次
P	画家渡辺華山の心象 『遊魚図』
P	華山先生略伝補 (2)
P	田原町博物館所蔵品から 華山史跡
P	城宝寺(2)(田原町) 厚木六勝
P	(神奈川県厚木市) 紀行文『游相日記』(1)
P	各地の美術館を訪ねて 「静嘉堂文庫美術館」
P	東京都世田谷区 華山の実像にふれて
P	華山先生の生き方 童浦小学校児童
P	田原町博物館からご案内

画家渡辺華山の心象

重要文化財 遊魚図

静嘉堂文庫美術館蔵

天保十一年（一八四〇）絹本着色

縦一一三・三cm 横五五・四cm



款識は「甲午秋月戲寫華山外史、印に白文長方印の「華山」と朱文亀甲印の「登」を使用しています。

華山が蛮社の獄で田原に蟄居していた天保十一年（一八四〇）の秋に椿椿山に宛てた『絵事御返事』（重要文化財、田原町蔵）の中に「海錯かいさく図八海魚深海中ニ遊泳スルノ體ヲ

認、先ツ古人モ不画所ニ、浪ニ少々古風ヲ加へ、魚八赤鬚あかひげ、青魚あおいしほ、梭魚かまニ鱸す丁ひしこヲアシラヒ申候」とあり、この遊魚図は海錯図に相当する作品と思われます。海錯とは海の豊かな恵みという意味です。椿山宛の書簡には日付が記されていませんが、華山幽居中の日記である『守困日歴』

中の天保十一年十月の記事と一致しているため、制作時期はこの年と推定されます。年紀の「甲午」は天保五年にあたりますが、蟄居中の身であるため、公儀を憚はばつて年代を遡さかのぼつて記したものと思われます。「波に少々古風を加え」というのは、華山が若い頃、幾度となく臨模した江戸狩野派風の波を指すのでしょうか。蟄居中の華山は觀海居士の号も使用しています。海が近い田原の地では、多くの取れたての魚を見ることも可能だったのでしょう。赤鬚などの魚は華山晩年の懐中写生帖である『翎毛虫魚冊れいもうちゅうぎょさふ』（足利市草雲美術館蔵）のスケッチを元に完成させたもので、華山の晩年の写実力を存分に発揮したものとといえます。また、「古人も画かざる所」とあり、実際に見通せない深海を遊泳する魚群の上下に波を配置する画面構成は時代の荒波にもまれた自分の姿を投影したのかもかもしれません。

田原町博物館学芸員

鈴木利昌

華山先生略伝補 (2)

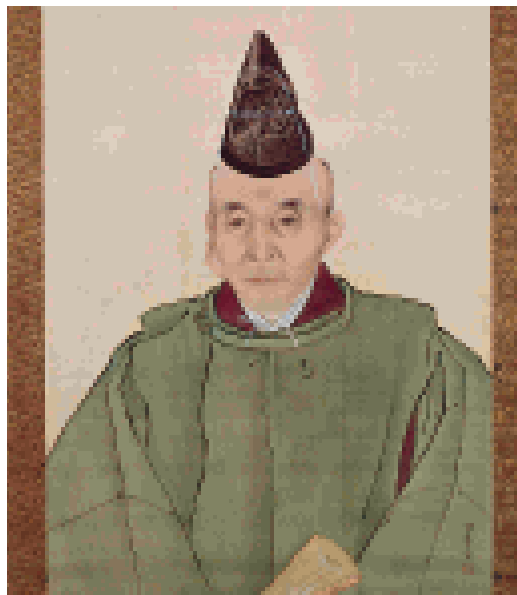
第六話 肖像画に新境地

先生は、いつも雁皮紙がんびしの小冊子を懐ふしに置いて、役所にいるときでも未だかつてその冊子を放したことがありません。旅に出るときでも、公務に出る時の駕籠かごの中であつても、眼に触れる物があれば、模写しないものはありませんでした。この小冊子は、幾度か身の丈ほどにもなりました。いまもこれらがあるかどうかわかりません。

先生は、三十歳の頃から画風が大いに変わりました。それ以前に描くところのものは、大抵谷文晁・北村(喜多)武清などの写生によく似ていました。その後一家の画風を成し、且つ西洋画の陰影のある絵に心酔し、大いにその方法に倣なまりました。これによって、肖像を描く絶妙の境地に到達しました。それ故に、有名な人や大家が先生にその肖像をお願いする者が多く、中でも佐藤一斎・市河米庵の肖像は最も真に迫ると言われております。ある時、市河米庵が肖像を先生に頼みました。

すると、先生は毎日下谷の居宅に出掛け、数日にして肖像を制作しました。米庵は大いに悦び、謝金を手厚くしてお礼しようと思いました。ところが、先生はそれを受け取ることはせずに言いました。「あなたが珍重して所蔵しておられる某の古画帖(明代のもの)、私はその名を忘れませんでした。」を常に渴望していました。もしこれをいただければそれで十分です。」

米庵は大変惜しいと思いましたが、やむを得ずこれを先生に与えました。先生はその帖を懐ふしにし



重要文化財 渡辺華山筆
市河米庵像
京都国立博物館蔵

て直ぐに去っていきました。その名利に汲々としていない様子はすこぶる昔の賢人の風格がありました。

因みに、こんな話があります。

先生が災難に逢った後、ある楼上で書画の人の集まる席がありました。有名な方々が多く集まりました。ある先生がいて、米庵に聞きました。

「あなたは華山を知っていますか、知っていますか。」

米庵は、

「知りません。それはどこの人ですか。」

又、聞きました。

「あなたの肖像は、どなたが描いた物ですか。」

米庵は答えることができず、恥して顔を赤らめて去っていきました。

思つに、蛮社の獄で逮捕されたとき、世上には様々な説がありました。

だから、米庵は先生が忌み嫌われることをおそれて、このようにいったのだということだ。

一座の人は、米庵を人情の薄い人だと悪口を言つたということがあります。

この聞いた人は、水戸の東湖先生であつたといふことでもあります。

第七話 西洋画に心酔

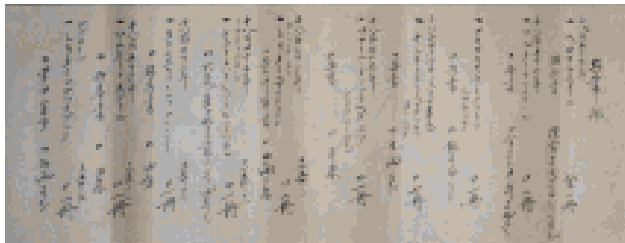
先生は、常に西洋画に心酔し、紙切れや断冊の画でも必ずお金を惜しまず、探して買いました。しかし、当時は江戸に洋画ははなはだ稀であつて、旗崎かみえ（幡崎が正しい）などについて請い求めたけれども、大抵は昔の銅版画の類でありました。後に石版の画の舶来の物を手に入れ、いよいよ西洋画の技の絶妙であることを賞嘆し、その方法を倣いしました。又、臙脂えんじに着色した牡丹花の如きは、その花の表面が日光を受ける所に丹の色で以て着色しました。これは、西洋の陰影の方法を工夫した、日本で未だかつて描いたことの無かつた新奇の方法といふべきであります。又、油絵を描くという志があり、既に富嶽などの景色を描いてはいましたが、彩色の材料や筆・道具に詳しくないために、途中で止めてしまったものもあります。これは私の見たところであります。

第八話 蘭学に深い関心

先生は、三十二、三歳の頃から、心を深く洋学に傾倒してました。しかし、自分自身では原書は詠みませんでした。但し、当時洋学といわれる

ものは、ただ阿蘭陀（オランダ）国の書冊があるだけでした。そして、その書物を読解する者は、江戸には小関三英・高野長英・畠中善良らの数人があるだけでした。

先生は、常に小関・高野の二氏を招き、地誌・歴史の類を読ませ、翻訳のことは聞きながら、それを筆記して冊子を編集しました。しかし、二人とも洋学の文章の意味を理解するの到大変難渋し、意味の通じにくいところも多くありました。それなのに、先生はその翻訳を聞き、筆記する所



三宅友信所蔵
蘭書目録



田原藩で使用した蘭書

は、二人の未だ及ばない意味を理解し、速やかにその文意を明らかにして述べ、よくその原書の要旨をとらえました。だから、常に二人は机を叩いてその頭の働きの素早いことに感服していました。

私が阿蘭陀の書典を持って楽しんでるのもまた、先生のお勧めであつて、毎歳春に長崎の翻訳官が阿蘭陀使節の貢ぎ物を江戸に献する時に、必ず阿蘭陀の書物を持ってくるので、（当時江戸市内の店では西洋の書物売るの許されていませんでした。だから、ただこの時だけわずかに西洋の書物を手に入れることができるだけでした。）私にその書物を買わせて、一室に蘭書が棟につかえるほどになりました。

こういふ訳で、愚昧な私が西洋の書物の端を窺い知ることができるようにも、皆先生のお陰であります。

こういふことで、先生の没後数年の後に、私が佐久間象山に識られるようになったのも蔵書に富むを以てであります。だから、私はいつも言っています。象山が私と交っているのは、蔵書と交わっているのだと。

こうして、笑い話にしています。
因みに、こんな話があります。

私がかつて、「軍用袖珍書（ミリタインサクキブック）」を翻訳官から購入できました。江戸に

はまだ無かったものですから、この書を手に入れて、「鈴林必携」を編集する原本にしようかと、深く秘蔵して人に見せませんでした。

ある日、象山が問い尋ねて、深雪を冒して私の庵を訪ねて来ました。

私は、直ぐさま出迎えて書室に案内し、爐を囲んで酒を酌み交わし、数刻に渡り閑談しました。

忽ち象山が言いました。

「あなたは近頃軍事の面でぜひ知らねばならないことが書かれている珍しい書物を手に入れたと聞いています。ぜひ一目見せてほしい。」

私は言いました。

「そんなものはありません。恐らくは誤って伝わったものでしょう。」と。

そして、又、杯を傾けて話をして時を移しました。

酒も回ってきて、象山が又言いました。

「軍事の面でぜひ知らねばならないことが書かれている珍しい書物はありますか。」

私は又答えました。

「ありません。」

再三この事について聞かれましたが、私は遂に無いと答えました。象山は、空しく深夜大雪を冒して帰っていきました。その後、どれほどもたないで、象山は国に帰りました。

これによって思うに、象山のような立派な人を欺く罪はどんなに後悔してもしきれません。今を去ること四十余年前の事ですが、夢のようであります。私は、象山を知る人に遇うことに、必ずこの事を述べて、仏になられた人への罪滅ぼしの気持ちを表しています。

第九話 華山と三英

先生は、常に考えておられました。

耶穌教は海外では普通の宗教であって、決して邪宗ではないと。

深くこれを疑問に思っていました。しかし、当時は厳禁で、その一端を窺う自由もありませんでした。たまたま吉利支略伝の小冊子を手に入れて、密かに小関三英に就いてこれを読ませ、且つ自分でその翻訳を記録しました。この一編の翻訳をまさに終わろうとする時に、三英は忽ち先生が逮捕されたという知らせを聞き、大いに驚き、且つ疑いました。あの方に何の罪があるのか。これはきつと近頃先生と訳読している書物が、耶穌教の国禁を犯しているからであろう。華山先生に何の罪があるのか。自分が自首して先生の災難を免れさせよう。すでに奉行所に赴こうとして、さらに熟思してみるに、自分は国禁を犯し、主家を巻き



小関三英の書簡

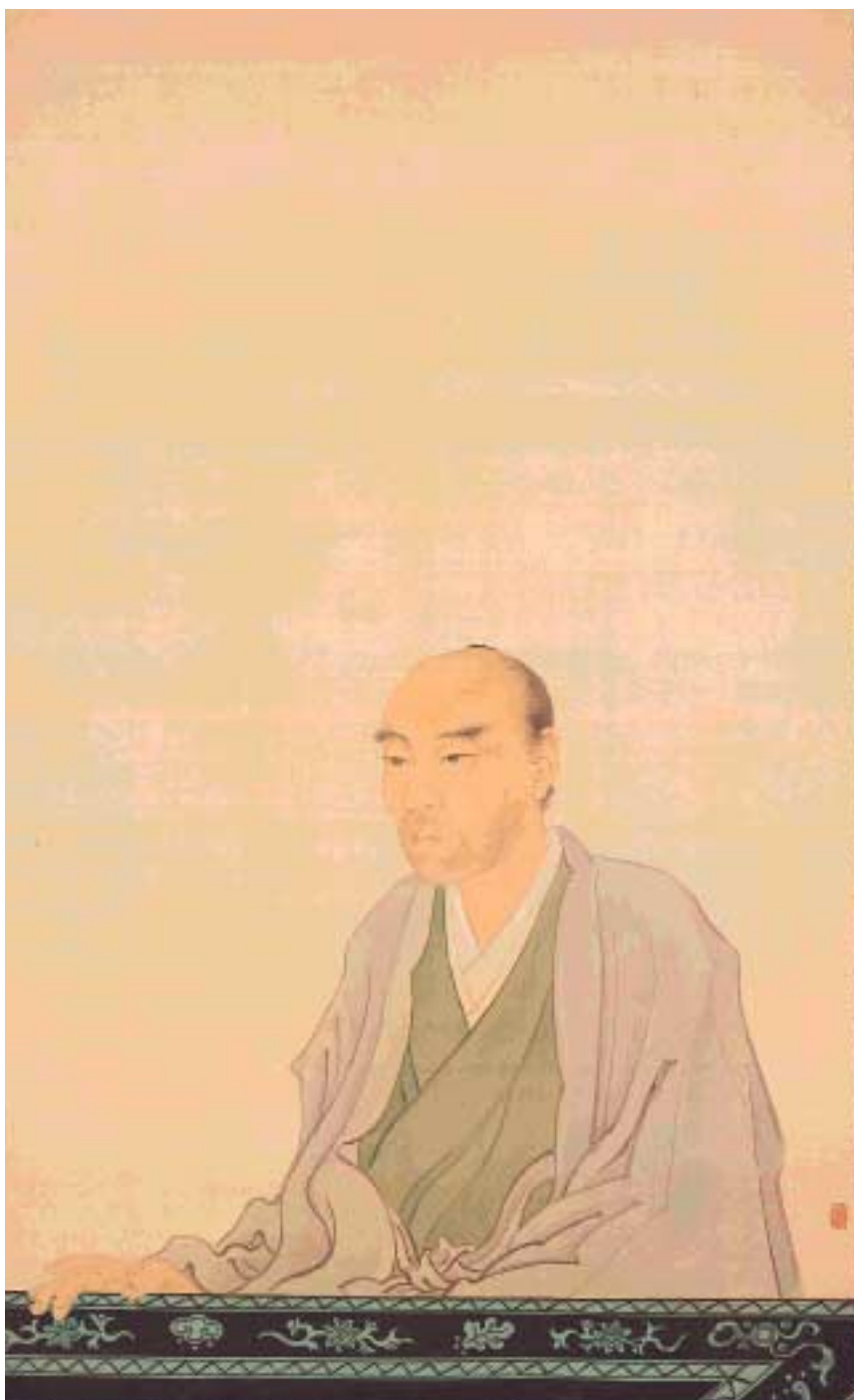
添えにし、磔の刑で殺される辱めを受けるよりは自殺するに及くものはないと。直ぐさま、その夜自刃しました。

三英は、出羽の人、岸和田岡部侯に洋学を以て仕えました。大榎盤溪に三英を悼む詩があります。私はその詩を忘れました。

研究会員 山田 哲夫

田原町博物館 所蔵品から

重要文化財 椿椿山筆渡辺華山像
嘉永六年（一八五三） 絹本着色
縦二二六・五cm 横八〇・二cm



絵に向かつて右下の印に白文長方形の「椿粥寫照之印」を使用しています。この印を使用する作品は、肖像画に限られ、また、印章のみを押し、姓名である「椿椿山・粥」等の表記をしないと思われます。他にこの印を使用した作品として弘化二年（一八四五）頃の作品と推定される

「高久靄厓像」、弘化四年作の「朝川善庵像」、嘉永四年十月作の東京国立博物館所蔵「佐藤一斎（80歳）夫妻像」が知られています。また、この作品に付属する巻止に「華山先生四十五歳象癸丑十月十一日稿」の椿山による自署と朱文円印の「椿山」が押されていることから

椿山（一八〇一〜五四）没年の一年前に、華山没後の十三周忌のために完成させたものであることがわかります。

この図を完成させるにあたり、椿山は華山没後の三周忌・七周忌に稿を描いています。天保十三年（一八四二）の一周忌に制作する予定でしたが、華山先生のことを考えると悲しく筆をとれないといった内容が、同じ華山の画弟子福田半香に宛てた手紙に記されています。今にも動きだし、語りかけてくるような迫真性は、師であり、友でもあった華山の肖像画技法を忠実に継承しています。

この作品は渡辺家に伝来する華山の肖像画で、昭和十三年九月五日に重要美術品の認定を受け、昭和三十年二月二日に他の遺品とともに、渡辺華山関係資料の一部として重要文化財に指定されています。昭和五十三年三月二十四日に歴史資料に指定替えられました。

田原町博物館学芸員 鈴木利昌

華山史跡

城宝寺(2) (田原町)

城宝寺の見どころの一つに華山霊牌堂があります。

霊牌堂建設にあたっては、「渡邊華山顕彰会」が発足し、名誉総裁に吉田茂（内閣総理大臣）、名誉会長に桑原幹根（愛知県知事）、会長に石黒利平（田原町長）、副会長に伊奈森大郎（教育者、華山研究者）が就任しました。実質の発起人は鈴木英治（田原座、映画館、料理旅館などを経営していた吉村屋の次男）、藤井宗一（赤松在住）、橋村泰雲（城宝寺住職）でした。英治は池ノ原公園幽居邸建設の発案もしています。英治は建設委員長、藤井は副委員長に就任し、建設費用の寄附集めに奔走しました。

この計画は華山の遺徳を偲ぶ多くの人々の心を動かしました。華山直系の南画家松林桂月（昭33年文化勲章受賞）もその一人で、霊牌堂の

天井を飾る絵を、当時の著名画家に呼びかけ寄附を依頼しました。発起人らは桂月の紹介状を携え画家のもとを訪れ揮毫を依頼しました。

昭和三十年五月十四日、発議からわずか2年を経て、木造瓦葺き約29坪の霊牌堂が完成しました。また、記念碑が建立され、関係者を集め除幕式も行われました。碑文は中村明人（津具村出身、元下関要塞司令官）によるものでした。

この年には、池ノ原公園の幽居邸復元、銅像の建立、また華山関係資料が国の重要文化財に指定されるなど、戦後の華山顕彰の記念すべき年となりました。

霊牌堂は本堂の北側に接して建設されました。板の間の前室と30畳の外陣と位牌が安置される須弥壇のある内陣の3部分になります。外陣の壁の展示ケースには華山及び城宝寺ゆかりの資料が展示されています。

寄附された天井画は91cm四方の格子内に、径81cmの紙の円窓に描かれています。着色或いは墨書の花鳥画

です。全73図あり、板の間に18図、堂内に55図が配置されています。桂月が記したとおり南画系、狩野派系、四条派系など、画系も地区も多方面からの作品が集まりました。松林桂月・雪貞夫妻、文化勲章受賞者の奥田元宋、佐藤太清などそうそうたる顔ぶれで、華山の霊前を飾るにふさわしい作品ばかりです。

絵のレイアウトは、桂月門人の白井烟岬（豊橋市出身。田原町町政功労者）が寺に宿泊し行いました。霊牌堂入口には鈴木翠軒（渥美町出身、文化功労者）の「華山先生霊



霊牌堂天井画

牌堂」題字が架けられ、堂内の壁には文化勲章受賞者の西川寧などの書額が13面飾られています。これらも霊牌堂建設のために各作家より寄附されたものです。

桂月の日記（昭和30年5月13日）には幽居邸復元、銅像、霊牌堂の建設に関われた感激が次のように記されています。「城寶寺の先生霊牌堂の入佛式に参列す。格天井七十二の寄附画は、予の名に於て、東都、京都、大阪、名古屋の諸画家の手によつて成るもの。此の超画派の寄贈は如何に先生の遺徳の多きかを想ふに足るものであると思ふ。」「予の一生の光榮、因縁を思ひて感激の外なし。」「椿山、幽谷（野口幽谷）、椿山門人、桂月の師（二翁にもなき眞に榮ある御縁に涙さへ浮かべり。」と。

研究会員 中神昌秀、増山禎之

霊牌堂の建設経緯は小沢耕一先生、城宝寺住職橋村賢龍氏に伺いました。

桂月先生の日記は松林清風氏より提供を受けました。

厚木六勝(神奈川県厚木市)

華山・史学研究会の今年の視察旅行は、『游相日記』の足跡を訪ねて、厚木市と綾瀬市小園を訪れました。

日記に出てくる厚木の万年屋で、華山は身分を明かし、「此里にわれにひとしき人しあれば、迎ひて夜を語りあかさまほしく思ふなり。物語人か、手なと書人か、歌はいかい、詩など好める人か、はなし好く人か、いつれ話をきかまほしく思えは、呼たまはれ」と人集めを依頼します。そして、集まってきた人の中の斉藤鐘助という手習いの師匠と唐沢蘭齋という医者二人が、華山に厚木六勝の絵を描くよう頼みます。今回の視察で厚木六勝のおおよその位置がわかりましたのでご紹介します。

仮屋喚渡

現在、相模川のほとりに、「厚木の渡し」の碑と「華山来遊記念碑」が建っています。このあたりから、対岸に向かって描いたと思われるます。渡しは、明治四十一年に相模大

橋が開通するまで使われていました。当時を偲ぶものは見られず、河原には乗用車が乗り入れられ、水遊びを楽しむ家族連れや釣り人の姿が見られます。

桐堤 蕙月

現在の「きりんど橋」付近から、桐辺堤を描いたと思われます。桐苗を植えたため、桐辺堤という名前ができたそうです。この辺りは、当時矢倉沢往還を流れる堀と、別の堀の合流地点で、「聖代(きりんど)橋」がかかっていました。小高い丘になっており、厚木の街が一望できたようです。

雨降晴雪

きりんど橋付近から見た大山(雨降山)を描いたようです。現在でもビルは建っているものの、大山を見ることができません。

相河清流

きりんど橋付近から見た相模川を描いたようです。現在、建物が密集して堤防すら見えません。

熊林眺鳥

境内は狭くなっていますが、熊野神社の社は残っています。社の後ろには、樹齢四五〇年ほどの銀杏の大木があります。まわりは民家に囲まれ、当時の森の面影はありません。

普願驟雨

当時は、「青田中に造り出て」という場所であったのですが、現在は厚木中学校となっており、天神さまの小祠もありません。

華山の訪れた当時「厚木の町の長

さ十八丁、上三四丁は巨商居並ひ、いとにきはしく、それより下つかたは、人の行きもままれらなり」という厚木の町は、今や人口二十万人を超える大都市になっています。当時の面影を偲ぶことなどは無理な話ですが、華山の足跡が現在も厚木にしっかりと残されていることに驚きを覚えました。

研究会員 柴田雅芳



紀行文
游相日記 (1)

天保二年（一八三一）九月二十日、渡辺華山は、江戸湾海防事情の視察を名目に、弟子の高木梧庵一人を伴って、江戸を立ち大山街道（矢倉沢往還ともいう）を厚木までの旅にでました。その時の日記が『游相日記』です。「游相」とは、「相模国へ遊んだ時の」という意味です。

この旅の大きな目的は、主筋に当たる三宅友信の生母、お銀さまを訪ねることでした。お銀さまは、相模国早川村の百姓の娘で、田原藩主三宅康友の侍女となつて友信を生みましたが、暇をとつて故郷へ帰り、大川家に嫁いでいました。

『游相日記』は、わずか五日間の旅日記にすぎませんが、お銀さま一家とのなごやかなふれあいを詳しく載せており、華山の人柄をしのばせるさわやかな紀行文です。また、大山街道の田園風景や人物往来の様子などについても、写生画を交えて、大変興味深く描いています。

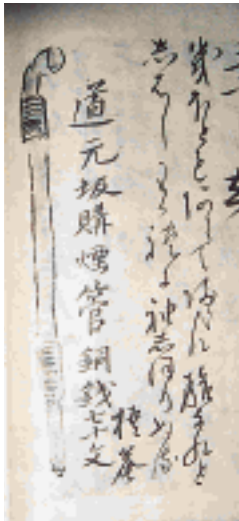
今回から、数回に渡つて『游相日記』を連載します。この日記は華山を代表する最も優れた日記でもあります。わかりやすく内容をご理解いただ

けるように口語訳を原則として連載しますが、華山の持ち味をしっかりと受けとめていただけるように、主要な部分については書き下し文のままを載せてゆきたいと思ひます。ご期待下さい。

天保二年（一八三一）九月二十日、高木梧庵をつれて相模国厚木（神奈川県厚木市）にでかけた。空は曇りで雨が降ってきた。簀笠を買い、銀十一錢三分。また胡粉と朱砂（絵の具）を買つたが、値は僅か一銖であつた。太白堂の主人長谷川氏を訪ね、青山（東京都港区）の飲酒店について錢一百二十文を払つて立ち去つた。

『幾ほともあらで帰らん旅なれと しばしわかれに 袖しほりぬる 梧庵』
道元坂（渋谷区道玄坂）で煙管を買つた。銅錢七十文。

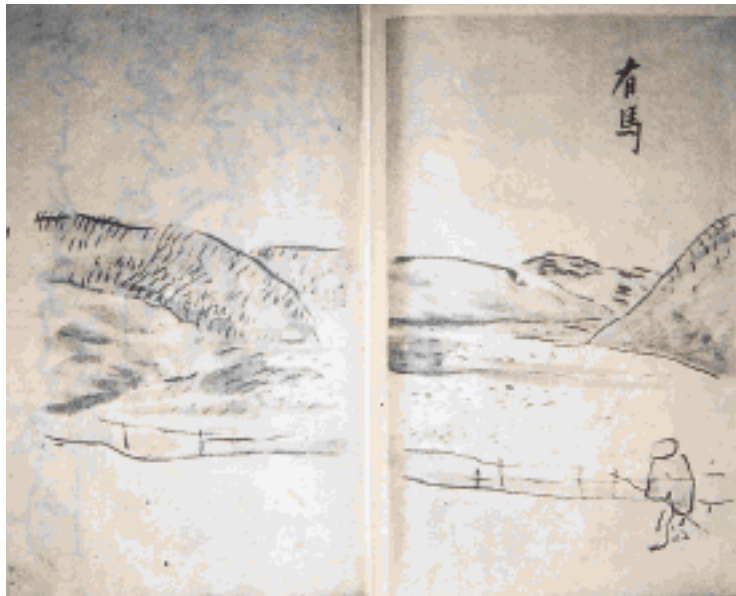
渋谷。目黒。用賀。瀬田。土は黒く、杉は黄色く、稲はよく実つている。城郭を出ると平坦な道が四里ほど続き、渡しがあつた。二子の渡し（川



崎市高津区で多摩川を渡る」といふ。宿駅より三十歩行くとまた宿場があつた。これを溝口（溝ノ口）という。土は白く、赤松が多い。岡も多く、土地の起伏が激しくうねつていた。笹原（笹原）有馬。小さく突き出た禿げ山が我々の行くのを見送つてゐるようだ。土地の様子は自ずから用賀や瀬田とは大いに異なつてゐる。荏田（武蔵国荏田村）横浜市青葉区荏田町）に泊まつた。

『客と友にまた客に行菊見かな
両方へ鶏の別る、一葉かな 一池 印』
右の一池とは即ち亭主の升屋喜兵衛である。

『秋の暮色もかはらぬ辻地蔵 半原村 孫兵衛』
荏田村の升屋喜兵衛という方に泊まる。主人はすこぶる俳諧を好む。名を一池、号を旭陽と呼ぶ。この地は有馬坂下といつて、山が多く田が少ない。芝（東京都港区）の増上寺領で、代官は奥隅志左衛門とよぶ。産物もなく、村は千二百石、戸數一百である。この宿に夜になつて着いた。座敷は奥の方にふた間あつて、新しく造つた家である。我々が借りた部屋はとくにきれいで安心した。隣にくしやみをする人がいた。どうしたのかとたずねると、この人も旅のお人で、我々より先に借りていて、灯りのものでうすくまつてゐる翁であつた。相州今泉（相模国高座郡下今泉村）神奈川



有馬のスケッチ

海老名市)という所の人で、領主、大沢二十郎殿の用事で江戸へ出てきたということである。今ひとり入って来た人は、相模の山奥に住む孫兵衛という無骨な男である。この人は秋の半ばから猪と鹿とを打って、都へ出すことを生業としているものである。所は半原(相模国愛甲郡半原村)神奈川県愛甲郡愛川町半原)といって、烏山侯(下野国)栃木県烏山藩大久保佐渡守三万石)の支封

(飛び領地)であるといふ。

主人は酒を買ってきて肴を用意し、書画を乞ってきた。酔いに乗じて、灯りのもとに数十枚を揮毫。また、半原の孫兵衛、今泉の佐右衛門が酒と肴を買ってきて書画を求めてきた。また揮毫。梧庵もまた画を作った。こつするうちに、酔いはますます甚だしく、俳諧の発句を作って謝った。

今泉の佐右衛門へおくる。

『荏田のやとりにて此人に逢ふ。』

百姓と寝もの語や稲の秋』

半原の孫兵衛におくる。

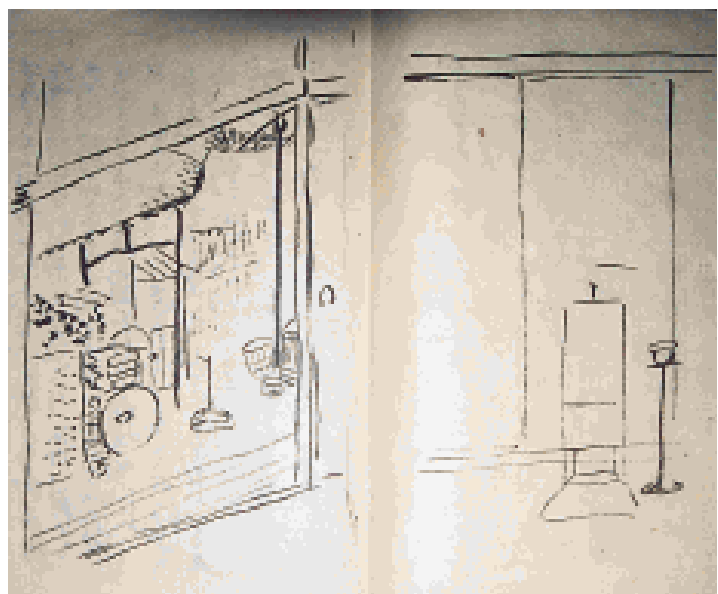
『いさとはん紅葉のしくれもる家か』

梧庵もまた、

『中々に逢にけるかなあはさらはかくも別れのおしからましを』

このあたりの人物はどうかとたずねたが、取り立てていっほどの者はいないということであった。

最近まで、京都よりやってきた歌詠みがあった。飯山(愛甲郡飯山村)厚木市飯山)という所に泊まっていた、訪ねてくる人も多かったという。名は道雄、藤原権介と呼んだ。また、高坐郡当麻(相模原市当麻)という所に時宗の寺があり、これを当麻山無量光寺という。寺主他阿(陀阿)俳号南謨)は俳諧を好み名がおっていた。



荏田の旅籠屋升屋

荏野(愛甲郡上荏野村)厚木市上荏野)という所に、洞々(高橋伊兵衛)という俳諧師がいた。半原の孫兵衛がいうことには、厚木と半原は烏山侯の領地である。寺政(悪政)が行われ、度々用金を申しつけ、一度に厚木ばかりに二千両取り上げたことがあった。このような寺政が行われていたので、棚村(高座郡田名村)相模原市田名)という所に土平治という人がおり、ついに徒党を

くんで江戸に出て門訴（藩主に訴える）に及び、その土地の責任者であった谷土地兵衛という者は、腹を切つて怨みにこたえ、土平治も獄に繋がれて死んだ。

これは、聞き書きによる間違い。土平治は、津久井郡牧野村（藤野町牧野）の人で、土平治騒動と田名村八郎左衛門の門訴と混同している。

宿賃四百六十文。

一池（荏田の升屋喜兵衛）がいうことには、最近、狼が近くの山中に来て住むようになり、たくさん犬をとつて喰う。夜な夜な往来へ出て人を狙うので、通る人も絶えてない。人家もまた、戸を固く閉ざして外に出ない。

またいう。観音講というものがあって、馬の売り買いをする。近くはいうまでもなく、遠い国々からも、馬を持って来られる限りは牽いてきて、売ったり、買ったりする。自分が持っている馬にあきたり、または、飼うことができない悪い馬などは、良い馬のようにこしらえなおして、互に見極めて買う。初めてくる人などは、ひどい目にあつて帰るが、またよい目を養つために、失敗も恐れずに出てきて、売り買ひするという。観音の像を中に置いてするので、この名がある。多くは馬頭観音であるということである。



子守の女

九月二十一日

『笹掛かしはりあけけり萩の花』

武長ツタ（武州長津田）『琴松』

長津田の農夫、松五郎、名を琴松と呼ぶ。私に

この句を送ってくれた。

澤月堂主人、袁氏（袁宏道）の瓶史（生花の持論書）に興味を深めて、心おどり、世間にひろめたので、また号を兔来と呼んだ。

『米はなに菊のこしをは君折む』

琴松は農夫である。私は初めて逢つたが、西晴（秋の畑）に仕事が残っているといつて出かけて行った。

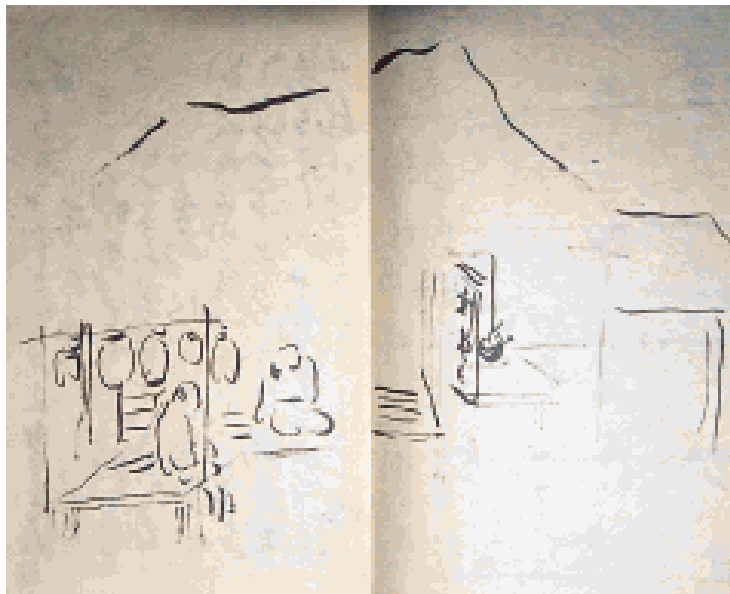
『はなしかけて麦時に行そ世は豊か』

兔来、旭陽堂と号している。萬屋藤七といい、経師（表具師）・行燈、たばこを商売としている。『大海や何処まで秋のとく音 兔来草』

九月二十一日

祖母君、母君のそばにいたいと思ひながら、耳慣れない鳥達が囀っている。障子を隔てて手をたたくので、これはどうしたかかと目をさますと、宵に書き散らした反故の中で枕を高くして寝ていた。召使いの女が雨戸を開けると、日は高く、気持ちよく晴れ渡っていて、昨日越えて来た山々が見えた。ようやく出発すると、やがて矢元（武蔵国都築郡谷本村＝横浜市青葉区谷本）という所に出た。橋があり、銭を取つて渡す。武士は銭は不要であった。恩田（武蔵国都築郡恩田村＝横浜市青葉区恩田）の茶店で休む。柿と栗を買った。銭は四十文。

上下蛇行した道を行くと、漸く長津田（武蔵国都築郡長津田村＝横浜市緑区長津田）という所に着いた。たばこ屋で休む。主人は、菊の花を生け



長津田 煙草屋

ていて、客の来たのも知らず、言葉も交わさない。梧庵がいった。あなたは、太白堂主人のいってよこした俳諧をたしなむ方かと問えば、いかにもそうであると言えた。それならば、私達は、江戸から来た者である。いささか俳諧にはたしなみがあるが、あらいざらいぶちまけても、いうほどにはなっていない。主人はなおももの言わず、壁に面して、この枝、あの枝を打ち、動かしてしぼら

くしてから、花を生け終わった。出迎えて問う。名をなんと申すかと言った。即、渡邊登と申す者であると答えた。俳諧には、どのように呼んでいるのかという。やはり登と答えた。いまだその名前を聞いたことはないけれども、太白堂の門下生であろうかと言った。あえて取り立てていうほどでもないが、一年に一・二度ばかりは訪問する。誰に学ばれたかと言った。誰にも学ばませんでした。自分で昔からしていると聞いた。主人は胆をつぶして、普通の人ではないと思ひ、私のいない所で梧庵にたずね、はてさて先生は人をばかにする人かと言った。まずは奥にお入り下さいといった。簡単な住まいなので、わざわざお迎えできる所もないがと行って、酒を買い、肴を作つて蕎麦を出した。この蕎麦は、きたならしくて味も悪い。麦飯を頼んだ。たいへん良い。松五郎という農夫もやつて来た。家のはしの方にいて、おじぎをした。この人は琴松と行って、この兎来よりは大きな家を持つていて、この夜、私を泊めようとしたが、先を急いでいたので承諾しなかった。書画を求め、梧庵とともに数枚を書いて与えた。なお引き留めて帰さないのを、振り切つて行く。琴松はやがて、二管の竹を切つたように、紙に包んで、別れのしるしに送ろうと言った。これはめずらしい竹だからと手にとつてみれば、銭であった。まことに興

ざめで、断ろうとしたが、たいそう素朴で敬つているようなので、さすがに返しにくく、この銭を持つて、酒と肴を買い出で行つた。平地が小さく、山が多い。土もまた黒い。養蚕を専らにしている。



蚕の本というものは、奥州からもつてきたものが佳いものである。田と田の間には、桑の木が植えてある。木の高さは、どれも五・六尺位で、梢を切つて、田畑が陰にならないようにしてある。

もし、木陰があれば、風をとおさず、日をさえぎり、田畑が痩せてしまうことになる。蚕の本はこのような図になっている。

【このところへ蚕種の略図を描き下に「立一尺許」「横五六寸許」と書いてある。また、上部へ「卵の数は幾万あるかわからない。重なり合つて赤黒い色をしている。鮫の皮のようだ。上の方に ついてるものには、あるいは白色のものもある。みんな用をなすのにさまざまにはならない。」と註釈している。】

研究会員 加藤克己

(続)

各地の美術館を訪ねて
「静嘉堂文庫美術館」



静嘉堂文庫美術館

東京都世田谷区岡本2-23-1

(〇三)三七〇〇-〇〇〇七

交通 東急新玉川線・田園都市線

大井町線二子玉川園駅下車

用賀行バス静嘉堂文庫下車

徒歩5分

三菱財閥の基礎を固めた岩崎弥之助とその長男で、三菱財閥を発展させた小弥太のコレクションを元にした財団法人の美術館です。

明治時代の実業家で、郵便汽船三菱会社社長就任後、日本郵船会社を創立した岩崎弥之助(一八五一一九〇八)は造船・銀行業等に進出し、三菱財閥の形成の基礎をなします。その後、日本銀行総裁に就任し、日本の金本位制確立にも貢献しました。また、弥之助は清末の四大蔵書家で、学者陸心源の蔵書約四万冊を入手し静嘉堂文庫を創設します。

弥之助の長男小弥太(一八七九一九四五)は英国ケンブリッジ大学を卒業し、三菱合資会社の社長に就任します。三菱の造船・銀行・商事などの各事業を分離し、独立の株式会社に変更します。また、航空機・電機・保険など新規企業の設立もしました。文化面では、西洋音楽の振興普及や成蹊学園の創立にも尽力しました。さらに、父弥之助の創設した静嘉堂文庫の蔵書を増やし、昭和

15年(一九四〇)に東洋学研究の世界的図書館として財団法人静嘉堂を設立して一般に公開しました。約二十万冊の蔵書と東洋古美術を収蔵しています。博物館登録された昭和52年から美術品の公開を開始し、平成4年に新美術館が開館しています。

横浜以西から美術館へ行くためには、新幹線新横浜駅から横浜線に乗り換えて1駅目の菊名駅で東急東横線に乗り換えます。16分ほどで自由が丘駅に出て、東急大井町線に乗り換え、8分ほどで二子玉川園駅に着きます。また、東京方面からは渋谷駅から東急新玉川線・田園都市線で13分で二子玉川園駅に着きます。駅前から用賀行のバスまたはタクシーが便利です。東京都世田谷区岡本の緑豊かな小高い丘陵地に静嘉堂文庫美術館があります。バス停からはゆるやかな登り坂が続く、開けると目の前にレンガ作りの文庫の建物が見えます。その左手に美術館があります。絵画、陶磁器、茶道具等のコレクションをテーマ・時期にあわせて

展示公開しています。

静嘉堂文庫美術館には早くから美術ファンに周知の渡辺華山作品が多数収蔵されています。巧みな陰影法を駆使して、描かれた人物の人格をも表現したといわれる日本の近世を代表する肖像画家としての評価を与えられる華山にしては数少ない実在の女性を描いた重要文化財「芸妓図」今回の『華山会報第3号』「画家・渡辺華山の心象」にも紹介している田原塾居中に描いた重要文化財「遊魚図」、雨あがりの山村の柔らかな雰囲気を感じ出す重要美術品「溪山細雨図」、晩秋の情緒豊かな風景を描いた重要美術品「月下鳴機図」などが代表的な作品でしょう。また、文庫には、華山の学問の師で、昌平覺で学んだ松崎謙堂の著作で、華山の訪問や壺社の獄に関連した事項を記録した「慊堂日曆」(49冊、文政6年)天保15年)や、華山の画弟子椿椿山の旧蔵書籍等も所蔵されています。

田原町博物館学芸員 鈴木利昌

華山の実像にふれて

研究会員

仲井千恵

広報たはらの「華山の絵の特徴と観賞のしかた」という見出しが目にとまり、好きな絵を観ることができるとなり、軽い気持ちで応募したのが研究会との出会いでした。会員の方々は立派な方の集まりで場違いなところにきてしまったかなと気おくれしました。しかし持ち前ののんきさでの仲間入りでした。

月例会では、古文書の輪読など、読めない時はパスし、楽しく参加してきました。華山といえは今までは「幼少より絵を描き、蘭学にすぐれ、報民倉を建て」と、立派なイメージばかりもってきました。しかし、旅日記等を読むと、来客とよく酒をくみかわし、肴はタイの厚切と具体的に記されており、今の人達とあまり変らない人間味あふれる華山像にもふれ、主婦としても興味深いものが

あります。挿入のスケッチ画には風景だけでなく、当時の参勤交代の侍の姿、お寺の僧などの姿も描かれており楽しいものです。

「華山先生略伝補」のなかでは、年長者を敬い、他人に寛大な様、例えば、ある時九十才の祖母が華山の大切にしていた古墨を「なぜ木炭を机の上に飾るのか。」と目の前で庭石に打ち当てこわし、火鉢の中に入れましたが、笑つてがめませんでした。又無気力な人と笑い話や世間話をしながら、その人にやる気を出させるのもたびたびありました。と書かれており、ますます興味がわいてきました。

年一回の研修旅行では、華山の足跡をたどり、現地の方の説明を聞き、今と昔の風景の違いなど往時をしるび楽しんでいきます。華山先生に興味があり、旅好きな方、話し好きな方は是非入会され、ご一緒に郷土のほころ偉人について楽しくおしゃべりができたらなと思います。

華山先生の生き方

童浦小学校

六年 三浦裕子

私は、渡辺華山先生については、有名な画家であるというくらいのことしか知りませんでした。

でも、学校でビデオを見せてもらったから、イメージがガラリと変わりました。華山先生は、有名な画家であると同時に、誇り高いりっぱな武士であり、すぐれた政治家であることが分かったからです。

だから私は、華山先生が自決されたことを、とても残念に思います。生きてさえいれば、新しい日本の夜明けがみられたかもしれないし、その後の社会に大きな影響を与えたかもしれないからです。日本の歴史が変わっていたかもしれません。なぜなら、当時の日本人の多くが思ってもみなかった「世界の中の日本のありかた」という考えをもっていた人だったからです。

華山先生の「自決する」という決断は本当に残念だし、びっくりしました。やりたいことも、まだまだたくさんあったことでしょう。でも華山先生は、「これ以上、周囲に迷惑はかけられない」と、自決の道を選びました。

「最後まで自分の意志を貫き通したという点でりっぱだ」という考え方もできますが、私が同じ立場に立つたとしても、とても自殺はできません。たぶんそれは、私の中に「自殺はいけないことだ」という考えがあるからだと思います。でも、その当時は、華山先生のように罰を受けた人は、自殺するのがあたりまえの時代だったのかもしれない。

私は、もともと田原に住んでいたわけではないので、田原町の歴史については、あまり知りません。でも華山先生のビデオを見せてもらって田原の歴史にも興味が湧いてきました。私は、これをきっかけに、田原の歴史について、少しずつ調べていきたいと思っています。

田原町博物館から
ご案内

企画展のご案内

九月二十九日～十月三十一日
毎週月曜日は休館。ただし十月十
一日は開館し、翌日休館
企画展 渡辺華山の書
(企画展示室1・2)



重要文化財
渡辺華山筆自筆墓表
田原町蔵

記念講演会「渡辺華山とその時代」
十月十一日(月)午後1時30分
華山会館鶴の間
講師 東京大学文学部教授
河野元昭氏

平常展のご案内

九月二十九日～十一月十四日
渡辺華山・椿椿山・渡辺如山
(特別展示室)
十一月十六日～十二月二十六日
渡辺華山・渡辺小華と閨秀画家
齋藤香玉(特別展示室)
十一月三日～十二月二十六日
渡辺華山とその時代(企画展示
室1)
田原の教育 教科書の歴史
(企画展示室2)
一月一日～二月二十日
谷文晁・渡辺華山とその弟子
(特別展示室)
一月一日～一月三十日
渡辺華山・小華とその周辺(企
画展示室1)
田原の教育 田原藩校成章館
(企画展示室2)
二月一日～三月五日
郷土の画人 白井烟嵐(企画展
示室2)
二月一日～二月二十七日

郷土の画人 三宅誠之助(企画
展示室1)
二月五日～三月五日

四代のひな人形・天神(企画展
示室2)

二月二十二日～四月十六日
渡辺華山・椿椿山とその周辺
(特別展示室)

三月一日～四月二十三日
花鳥画 椿椿系を中心に(企画
展示室1)

三月八日～四月二十三日
人物画 椿椿山から錦木華国ま
で(企画展示室2)

企画展時 9月29日～10月31日
観覧料 一般三〇〇円(二四〇円)

小中生一〇〇円(八〇円)

平常展時 11月3日～3月31日

毎週月曜日は休館

11月2日は臨時休館

観覧料 一般二〇〇円(一六〇円)

小中生一〇〇円(八〇円)

()内は二十名以上の団体の料金

華山会報第三号

平成二十一年一月二日
編集発行財団法人華山会
事務局長 中神洋一

千四四一―二四二

愛知県渥美郡田原巴江二の二

TEL 五三二二・二二七

FAX 五三二二・二二七

編集・協力

田原町博物館

館長 鈴木啓之

副館長 加藤 均

係長 寺田博隆

学芸員 鈴木利昌

華山・史学研究会

会長 渡辺百祥

林 和彦 尾川新一

山田哲夫 我部山正

林 哲志 小川金一

柴田雅芳 増山禎之

加藤克己 中神昌秀

華山会・理事

福井半治 小澤耕一

大羽 敏 加藤寛一

華山会報ご希望の方は華山会館・
田原町博物館にお申し出下さい。

次回発行予定二二年三月一日